

## 第 21 回講道館日本語教育ボランティア実施報告 ～世界の柔道コーチの皆さんとの双方向的な言語文化教育活動～

齋藤孝滋 石本桃子 木村奈々子 後藤可夏 告明音 吉岡希光

### I. 概要

齋藤 孝滋

#### 1. 講道館日本語教育ボランティアとは

スポーツ全種目においてはサッカーに次ぐ世界第 2 位、格闘技系競技においては第 1 位の競技人口を誇る日本発祥の世界文化柔道。本企画は、世界各国から柔道の総本山講道館に指導者研修の為に訪れた柔道コーチの皆さんにご協力いただき、一日都内観光の場をお借りし実施する日本語教育活動です。

日本語教育活動といっても、実際は、フェリス生が各国柔道コーチのみなさんに日本語を教えるのみにとどまらず、反対にフェリス生が柔道コーチの皆さんから母語や様々な文化を教わる形式で行うものです。いわば、世界の柔道コーチの皆さんとの双方向的な言語文化教育活動なのです。

また、本企画は、2003 年開始以来、既に 40 ヶ国以上の柔道コーチにご参加いただき、フェリス生の参加学生も全学部全学科に及びます。

21 回目を迎える今回は、2016 年 3 月 19 日に、講道館国際部課長大辻広文先生のご引率のもと、モンゴル・サウジアラビア・マダガスカル・ブラジル・ブルガリアの柔道コーチ、フェリスからは、文学部コミュニケーション学科 2 年生 5 名（石本桃子、木村奈々子、後藤可夏、告明音、吉岡希光）、引率教員 1 名（文学部教授 齋藤孝滋）が参加し、実施されました。

ルートは、講道館→永昌寺（講道館発祥の地）→浅草→増上寺→東京タワーです。



講道館正面玄関の嘉納治五郎師範像前にて  
一番右はご引率の講道館国際部大辻広文先生。



浅草、浅草寺にて。

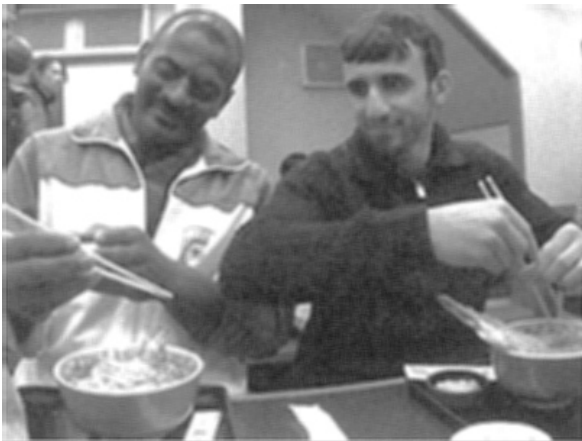
## 2. 双方向的な言語文化教育活動

活動は、行く先々で、柔道コーチの皆さんにポラロイドカメラで興味あるものを撮影していただき、その写真の説明を、ポラロイド写真の余白に、フェリス生が日本語（ローマ字と平仮名）で、コーチの皆さんがそれぞれの母語（の文字）で記し、相互にその表現を学びあうというものです。

昼食も重要な双方向的文化教育活動の場です。話題は、箸の使い方から始まり、海老の種類、トウガラシから様々な文化圏の香辛料へとどんどん展開し、相互の食文化について、楽しく学びあうことができます。



ポラロイド写真による双方向的言語教育活動風景。  
左はチンバット先生（モンゴル）。



箸の使い方講習。  
左はマノエリナ先生（マダガスカル）。  
右はアリ先生（サウジアラビア）。

## 3. 対照言語教育教材の作成

最終見学場所の東京タワーでは自由時間の合間に対照言語教育教材を作成します。ポラロイドカメラの余白に記した日本語と柔道コーチの母語の表現を、前者はフェリス生が発音し、後者は柔道コーチご本人に発音して頂く様子を収録し、ネイティブによる対照言語教育教材（画像音声教材）を作成するのです。

今回は、モンゴル語と日本語、アラビア語と日本語、マダガスカル語と日本語、ポルトガルと日本語、ブルガリア語と日本語の貴重かつ生き生きとした対照言語教育教材を作成することができました。



ブルガリア語と日本語の対照言語教育教材例  
(ブルガリア語表記発音協力：スヴィレン先生)



モンゴル語と日本語の対照言語教育教材例  
(モンゴル語表記発音協力：チンバット先生、パッ  
デグリ先生)



ポルトガル語と日本語の対照言語教育教材例  
(ポルトガル語表記発音協力：オマール先生)



アラビア語と日本語の対照言語教育教材例  
 (アラビア語表記発音協力:ヤシル先生、アリ先生)



マダガスカル語と日本語の対照言語教育教材例  
 (マダガスカル語表記発音協力: アンツァ先生、マノエリナ先生)

#### 4. 今後へ向けて

毎回貴重な機会を賜っている講道館館長先生、講道館国際部の先生方、ご協力くださった柔道コーチの皆さんに、感謝申し上げます。

参加学生には、講道館日本語教育ボランティアの双方向的な言語文化教育活動で得られたノウハウや問題意識をさらに高め、社会貢献へとつなげていくことが期待されます。

また、作成した対照言語教育教材も、様々な導入教育活動で使用させていただき予定です。(なお、ポラロイド写真本体は、撮影された柔道コーチの皆さんに記念としてお渡ししております)。

今後とも、講道館の先生方、世界の柔道コーチの皆様のご協力をいただきながら、楽しく充実した双方向的な言語文化教育体験の場として実施できれば、幸甚に存じます。

## II. 参加学生報告

### 講道館ボランティア参加報告 1

石本 桃子

「一緒に入る？」カタコトの日本語で、そう話しかけてくれたサウジアラビア人の方の優しさを今でも忘れられません。その日は雨が降っていましたが、私だけ傘を忘れてしまい、困っていました。しかしこれが逆に、距離を縮めるきっかけになりました。

2016年3月19日、日本語教育ボランティアの活動で初めて講道館へ足を運びました。フェリス女学院大学の学生と、柔道家の方がペアになり「永昌寺」「浅草」「増上寺」「東京タワー」の四か所を周るというプランです。他国の言葉が全く話せず、聞き取ることが出来なかった私は、本当に不安でしかありませんでした。しかし、傘に入れてもらっている私は、雨の中一つ傘の下で同じ道を同じテンポで歩くことが出来ました。お昼には同じお蕎麦を食べ盛り上がり、物理的な距離が縮まると同時に心の距離も縮まり、もっと知りたいという感情が芽生えました。次第に私たちはジェスチャーや表情で話すようになりました。相手の言葉なんてお互い殆んど理解できていないのに、何故か笑いが絶えなく、とても有意義で楽しい時間が過ごせました。その様子は、齋藤先生からも驚かれる程でした。

異文化コミュニケーションにおいて、異文化摩擦は避けることができないと思います。異なる言語を話し、異なる文化で育った相手を完全に理解することや、言いたいことを読み取ることは難しいです。時には、小さな誤解をしてしまうこともあるだろうと思います。以前までの私は、そのズレに立ち向かうのが怖かったのです。しかし今回の活動を通して、心と心で寄り添い、目と目でコミュニケーションをとることの楽しさを発見でき、視野が広がりました。こんなに素敵な活動に参加出来たことを誇りに思います。

### 講道館ボランティア参加報告 2

木村 奈々子

私たちは、世界の柔道のコーチの方々に日本を親しんでもらうために、毎年行われている講道館ボランティアに参加してきました。

参加する前は、ほとんどの方が英語圏以外から来たということだったので、どうやってコミュニケーションをとろうかと悩みましたが、実際に会ってみるとその悩みは消えました。一緒に散策して案内をするというよりは、一緒に楽しみながら日本の良さを知ってもらおうという感じでした。当日は、雨がぱらついていて曇り空でしたが、なんとか予定通りに進むことが出来ました。

まず、講道館柔道の発祥の地である永昌寺に行きました。皆さんとても興味深く見ていて、柔道への愛を感じました。その後、浅草に向くと雷門を潜り、仲見世通りを散策してから浅草寺でお参りをしました。この時に、2人が逸れてしまうハプニングがありましたが、そこはさすが柔道家。とても体が大きくて、身長も高いのですぐに見つけることができました。次に、休憩を兼ねて最近流行っている抹茶のジェラート屋さんに行くことになりました。有名店ということもあり、たくさん行列が出来ていたので、待ち時間に齋藤ゼミの私たちは、言語学研究の一環として、それぞれの母国語の音声を録音させていただきました。改めて世界にはいろんな言語があるということに気付かされました。その中には、マダガスカルから来た方もいて、私たちが普段触れ合うことがない国の方とも交流を持つ良い機会にもなりました。

その後、増上寺を見学して東京タワーに登りました。皆さん、展望台から見る東京の景色を見て、写真をたくさん撮ってとても感激していたので、日本で楽しい思い出を作ることに協力できて良かったと感じました。

### 講道館ボランティア参加報告 3

後藤 可夏

講道館ボランティアを通してマダガスカルやモンゴル、サウジアラビアなど今まで出会ったことのない国の方と交流を持てたことが一番良かったと思っています。初めは言葉が通じないことに不安があり、積極的に関わることができませんでした。しかし話しかけてみるとどの方もとても友好的で優しく、お互いに伝えようとするのでなんとかコミュニケーションをとることができました。私は英語が得意ではありませんでしたが、語学力の有る無しに関わらず交流を楽しめました。文法や語彙の多さは会話する上で大切ですが、それ以上に相手にどうにかして伝えようとする人やコミュニケーションを楽しもうとする姿勢が大切であることをこの体験で学びました。浅草の神社に行ったとき、どうして5の付く小銭を賽銭箱に投げ入れるのか尋ねられましたがどのように言ったらいいのか分からず、歯痒い思いをすることもありました。しかしその歯痒い経験も今後の学生生活へのモチベーションを上げてくれました。ボランティアというとなんとなく大きなことのように感じますが、この講道館ボランティアは私たちが日本語を教えてあげることよりもむしろ各国の先生方から貴重な経験をさせていただいた事のほうが大きかったと思います。全く知識のない国についてお話を聞くことができたり、母国と日本を比べた印象を伺うことができたりと、短い時間でしたが良い交流ができたと思っています。このような機会がなければ自分一人では興味があってもなかなか参加できなかつたと思うので、今回このボランティアに参加することができ嬉しく思います。もともと様々な人と関わることが好きでしたが、改めてその楽しさを感じました。日本人だけではなく多様な文化を持つ人とも関わられるように、残りの学生生活で語学や海外の文化について学んでいきたいと感じました。このボランティアを経験して、ただ楽しめただけではなく今後の目標もできたので非常に有意義な時間でした。

### 講道館ボランティア参加報告 4

告 明音

講道館ボランティアでは、柔道の先生方に学生が付いて、浅草の街をご案内しながら先生の母国語の発音を機材で録音し、研究材料とさせていただきます。私が担当させていただいたのは、モンゴル出身のお二人の先生でした。お会いしてすぐは、日本語はもちろん通じず、私の拙い英語でもあまりコミュニケーションが図れず、今まで感じたことのない戸惑いと焦りを感じました。しかし浅草の雷門や増上寺、東京タワーを案内していくうちに、自然とジェスチャーを交えながらお二人と楽しいコミュニケーションをとることができました。

先生方は、日本伝統のスポーツである柔道のコーチをされていることもあり、すぐく日本語に興味を示して下さいました。街中のあらゆる看板を見ては、「これはなんて読むの？」と積極的に話しかけて下さいました。また日本語の数字の読み方は、海外の方にとっては非常に難しいようで、特に11から先は全く分からないと仰っていました。そこで浅草寺から駅までの道のりを、1.2.3.4.5...と1から20まで先生方と唱えながら散歩することを提案しました。そしてその結果、お二人とも11から20までの数字をスラスラと言えるようになりました。

日本語をお教える中で、先生方に良く理解していただくためには、自分自身がその言葉1つ1つの意味をきちんと理解する必要があるなど感じました。今回の経験で改めて、日本語の深さと難しさを実感することができました。

モンゴル語と日本語の比較研究の資料集めでは、浅草寺や東京タワーに行った際に写真を撮影し、写真に対応する日本語を私たち学生がローマ字で書いて、それをモンゴル語で読み上げて頂きました。先生方はとても快く協力してくださり、どのチームよりも早く分析を終えることができました。担当させていただいたモンゴルの先生以外にも、昼食や観光ではさまざまな国の先生方とお話しをさせていただきました。東京タワーに登った際には、ガラス床にたくさんの先生方を私がお案内して、東京タワーの魅力をアピールしました。今回の講道館ボランティアでは、今まで知らなかった国のことを深く理解することができたことはもちろん、日本の良さも再確認することができたことが私の大きな収穫です。来年また機会があれば、ぜひ参加させていただきたいです。

## 講道館ボランティア参加報告 5

吉岡 希光

今回のボランティアでは、私が今までに行ったことのない様々な国、そして実際に耳にしたことのない言語などを学ぶことができました。

観光をしながら興味のあるものを写真に撮っていただき、「日本語ではどう言うのか?」「コーチの方それぞれの母語では?」を互いに書き込んでいくという活動は、会話も楽しみながらそれぞれの国の表現を学ぶことができました。また言語だけではなく、文化も様々で言葉もうまく伝えられないという状況で、コミュニケーションも学ぶことができました。ボランティアと言っても、私たちが一方的に教えるのではなく、互いに、むしろこちらのほうが学ぶところの多い、そんな体験でした。

教授から講道館日本語教育ボランティアの話聞き、参加前は「母語であるとはいえ日本語を教えるなんて出来ない」「英語も話せないし不安だ」と身構えていましたが、それは全くの杞憂に終わり、今回のこの経験は他では味わえない貴重なものになりました。

本報告は、フェリス女学院大学 HP「フェリスと私ーフェリスで学ぶー学び」に掲載された同名の報告 (<http://www.ferris.ac.jp/watashi/learn/>) をもととし、参加学生の参加報告を加えたものです。

謝辞：講道館館長上村春樹先生、国際部の先生方、ご引率賜った講道館国際部課長大辻広文先生に深く感謝申し上げます。